第28回

鴻巣市合併20周年記念

須田剋太展

没後35年 須田剋太の原点をさぐる

2025 9.17(水)－9.22(月)

入場無料 10:00－17:00 ※最終日午後4時まで

吹上生涯学習センター

鴻巣市吹上富士見1-11
（JR高崎線 吹上駅南口 徒歩2分）

詳細は鴻巣市HPもご覧ください

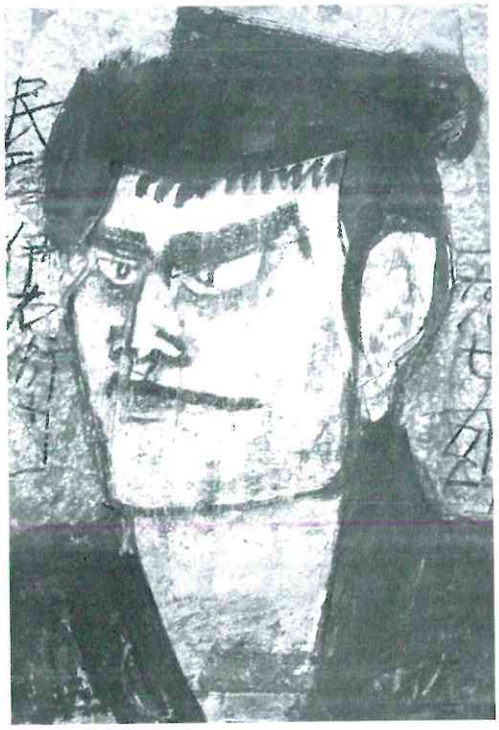
同時開催 熊谷市小八林1022 TEL:0493-39-2025 10:00－16:00

「須田剋太 鴻巣市所蔵作品展」長島記念館

主催：須田剋太展実行委員会
共催：鴻巣市、鴻巣市教育委員会
後援：朝日新聞さいたま支局、株式会社 埼玉りそな銀行
東京新聞さいたま支局、株式会社 埼玉新聞社
問い合わせ：鴻巣市教育委員会 生涯学習課

©東大寺

宙（ちゅう）



悪　民谷伊右衛門

鴻巣市合併20周年記念

第28回 須田剋太展

没後35年
須田剋太の
原点をさぐる

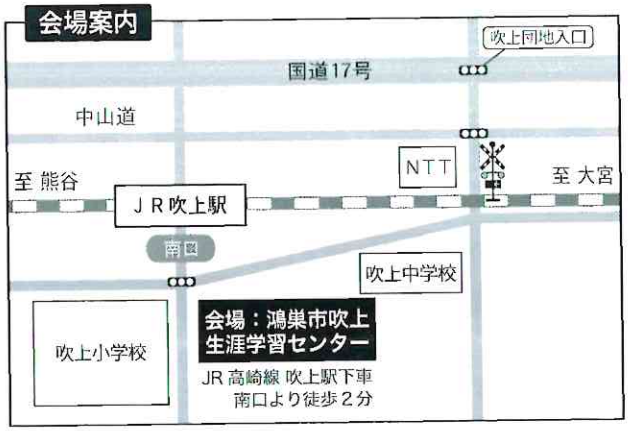
今年度の須田剋太展のテーマは、「没後35年 須田剋太の原点をさぐる」です。須田氏は旧制熊谷中学校（現熊谷高等学校）時代に重い腎臓炎に罹り、浅間山の麓で転地療養をします。その間、時には死の不安にも駆られながら何とか病気を治して復学しますが、療養中自分の弱い体でも打ち込めるものは何かと考え、絵の世界に専心していきます。この若き日の体験により生命の大切さを自覚し、それが後年の力強い生命力にあふれた作品を生み出す源泉になっていたと考えられます。

また、須田氏は吹上を出てから住んだ絵の町・浦和では寺内萬治郎や林倭衛（しずえ）ら多くの画家たちに出会い、作画力を伸ばしていきました。その後移り住んだ古都・奈良では画家や小説家・歌人・写真家ら様々な芸術家たちと出会い、感性をどんどん磨いていきました。さらに奈良では国宝級の仏像や建築に接し、それらの素晴らしさに感動しながら制作を重ね、仏師や建築家の創造力からも制作上の大切な視点や姿勢を次々と学んでいきました。

戦後は日本にも流入してきた抽象画に関して、その理論的指導者・長谷川三郎から抽象の理念を教わり、道元の『正法眼蔵』を読み始めます。以後は具象画から抽象画に移り、ほぼ20年間抽象画を描き続けました。

また、須田氏は後年には書にも打ち込みましたが、『正法眼蔵』から引用した言葉も少なくありません。

そして、昭和44年、毎日新聞の夕刊に連載された『日本人の記録 犬養木堂』（犬養毅元首相の活躍した時代の世相を著したもの）の挿絵を担当すると、それまで学んできた具象画と抽象画の両面が折衷された画風が多くの読者を惹きつけました。その画風は、“半具象画”とも称され、須田氏ならではの画風でした。

２年後には国民作家・司馬遼太郎の代表的な紀行文である『街道をゆく』の挿絵を担当し、須田氏特有の印象的な挿絵が読者を魅了し続けました。こうして、自らの体験や多くの優れた人たち、数々の芸術的な作品、抽象画の理論等の出会いにより、須田氏独自の芸術が生み出されていったと考えられます。

どうぞ、展示された作品から、それらの特徴を十分にご堪能ください。（須田剋太研究会）